

初期真宗の教団指導者像

黒田義道

一、問題の所在

仏教が広まる場合、人と人との接触による場合が考えられる。その時、導く者（指導者）と導かれる者の関係が生まれ、それは多く師弟関係で把握される。一方、真宗教団で指導者を指す言葉として「師」以外に「善知識」を挙げることができ、^①「善知識」は後の親鸞門流の教団で、（善）知識帰命と呼ばれる信心が生じたり、本願寺宗主を指す言葉になるなど、「師」にはない展開を見せ、注目される。

ところが、これまで「師」と「善知識」の共通性は当然視される一方で、管見の限り、その相違は充分に注目されていない。そこで本論では両者をひとまず異なるものと扱って、無条件には同一視せず、初期教団の教団指導者像を考えてみたい。本論では歴史的な面からの検討を中心とする。特に親鸞と覚如・存覚の間を結び、かつ初期真宗の中心地であった関東にルーツを持つ親鸞門下を検討対象とし、「善知識」展

開の前提を確かめたい。

具体的には、「師」「善知識」共通点と相異点、初期教団の実態を反映していると考えられる親鸞の「御消息」に触れた後、初期真宗の教団指導者の姿が、「師」「善知識」のいずれであったのかを光明本尊を手がかりに考える。

二、「師」「善知識」の共通点と相違点

「師」「善知識」の共通点と相異点はどこにあるのか、^①仏教一般での意味、親鸞などの用例から際立つ点をまとめると、まず、共通点は人を導くという点である。

相異点は次の三点が重要である。第一は対義語である。「師」は「弟子」に対す一方、「善知識」は「悪知識」に対す。「師」が師弟関係という一種の上下関係を重視する一方、「善知識」は「知識（知人の意）」が、人を導く方向が問題にされている。善なる方向へ導くのであれば「善知識」と呼ばれ、逆ならば「悪知識」になると言える。「善知識」は指導者とそれに導か

れる者がよく知る知人、言わば仲間であることが重視されていると考えられる。これは善なる方向にともに進む関係であるともいえる。

これに関連しても挙げ得る第二の相違点は、同行の側面の有無である。「師」は常に導く立場に立ち続け、同行の側面は持たない一方、「善知識」はその側面を持つ。例えば『摩訶止観』には善知識の種別に外護・同行・教授が挙げられ、同行の面について、切磋琢磨して志を等しくして一船に乗るように、互いに敬重して世尊を見るごとくするとある。

第三は、仏教語か否かである。「師」は仏教以外の場面でも用いられる一方、「善知識」は仏教語である。従って「善知識」が導くのは、必ず成仏を目指す方向であると言える。

これら三点のうち、最も重要なのが同行の側面の有無である。指導者像を考えようとする場合に、指導者とその指導を受ける者ものが、一種の上下関係で結ばれているのか、同じ方向を向いた仲間の関係で結ばれているのかは大きな相違である。さらに、法然、親鸞の教団の中で用いられる「師」「善知識」を考えした場合、「善知識」の説く「善」なる教えは法然・親鸞の教えに一応限定できるが、「師」はそれに限定できない。聖道門の教えによって人を導く指導者も「師」と呼ばれている。従って、「善知識」は必然的に同行の側面を持つことになると言える。

三、親鸞「御消息」から窺われる「師」と「善知識」

親鸞の「師」「善知識」の用例のうち、「御消息」にあるものが、最も教団の実態を反映している⁽³⁾。特に「師」「善知識」が並んで現れる、①『末灯鈔』第二十通、②『末灯鈔』第十九通の一部、『親鸞聖人御消息集』（広本）第四通、③『親鸞聖人御消息集』（略本）第四通、④『親鸞聖人御消息集』（略本）第五通が注目される。

これらの「御消息」を中心に考えられることについて、略述すると、ある教団を主宰する指導者を「師」といい、その門下の同行の中の指導者を「善知識」と呼んでいるとみられる。例えば、法然門下を一単位で考えた場合、「師」は法然を指し「善知識」は聖覚・隆寛らを指していると考えられる（御消息）③。親鸞自身を「師」と位置づけられていると考えられる例（御消息）②、あるいは親鸞門下の大小の門徒集団の主宰者を「師」、その集団内での指導者を「善知識」と呼んでいると考えるのが最も自然なケース（御消息）①④がある。「御消息」では二つの語が註釈無く用いられ、読み聞かせの依頼がされているなど、親鸞とその門弟の間に両者の語意の共通理解があったと考えることができる。親鸞の存命中、「師」と「善知識」が全くの同義語ではなかったのは明かである。

四、光明本尊に見る指導者像

では、初期真宗教団の中で指導者はどのような性格が求められたのだろうか。親鸞門下の人々は、自分たちを導いてくれる指導者を、師弟関係を重視した「師」として見ていたのか、同行の関係を前提とした「善知識」として見ていたのか、いずれであろうか。

光明本尊がそれを知る史料となる。光明本尊は真宗独特の本尊であり、名号から放たれる光明の中に釈迦・弥陀二尊や、インド・中国の菩薩、高僧、聖徳太子とその侍臣、源信、法然とその門下、親鸞門下の指導者などが描かれる。多くが鎌倉時代後半から室町時代に制作された。⁽⁵⁾本論で注目するのは、最初期の光明本尊における法然以下の描かれ方である。典型的な光明本尊では、法然の前（画面下方）に信空、聖覚が描かれ、法然と同じ高さかその後（画面上方）に親鸞が描かれる。さらに後方に向かつて親鸞門下が描かれ、それぞれの画像に付けられた札銘とアイコンタクトによって、真仏―源海―了海……などと、その光明本尊を制作した門徒の系譜をたどれるものもある。つまり光明本尊には親鸞以下、初期真宗教団の教団指導者が描かれているのである。

まず、光明本尊の原型というべきもので、十三世紀中葉、親鸞存命中の制作と考えられている愛知県妙源寺蔵光明本尊⁽⁶⁾

に注目したい。ここでの法然以下の描かれ方を見ると、礼盤に座す法然の前に脇侍のようにその弟子の信空、聖覚が上畳に座して描かれている。親鸞は法然の向かつて左後にやや控えめに上畳に座して描かれている。ここでは敬意の度合が「法然↓信空と聖覚↓親鸞」であるのは明かである。

次に、十四世紀初葉に制作された福島県光照寺蔵光明本尊⁽⁷⁾では、法然は色衣を着て椅子に座し、同じく色衣を着て椅子や背もたれのついた礼盤に座す中国の高僧や源信と同じ格式になっており、法然の神格化が急速に進んでいる。信空、聖覚、親鸞とその門下は同じ黒い衣をまとい、親鸞のみが礼盤に座し、他は上畳を用いている。

十四世紀中葉に制作の岩手県本誓寺蔵光明本尊では、色衣を着て椅子に座す神格化の進んだ法然を囲むように親鸞とその門下が描かれている。親鸞以下はすべて黒い衣を着て上畳を用い、平等の扱いである。ほぼ同時期の文和五年（二三五六）に制作された滋賀県西通寺蔵光明本尊では、色衣を着て椅子に座す法然が描かれ、信空、聖覚、親鸞とその門弟は同じ黒い衣を着ている。親鸞と真仏が礼盤を用い他は上畳と、法然門下の中で敬意の度合につけられているが、親鸞とその高弟真仏が同じ扱いであることもまた目を引く。

これらの制作の年代が古い光明本尊において、通常信空や聖覚が描かれることや装束・座具の相違に注目すると、敬意

の度合に差が見られるとはいえ、親鸞とその門下は一貫して法然門下の指導者として描かれていると言える。法然の神格化が進む対して、親鸞は常にその門下の人々と共通点を持った描かれ方をしている。つまり初期真宗の教団指導者像は、法然の説いた選択本願念仏の教えにしたがって、善なる方向、すなわち往生浄土に、自分たちとともに向かう同行の面を持つ「善知識」と重ねて考えることができるのである。礼拝の対象という光明本尊の性格を考えれば、「師」である法然の門下の中で、「善知識」として人々を導く指導者が少なくとも理想的な姿とされていたと考えられる。

なお、親鸞門下の大小の門徒集団の主宰者を「師」としてゆく見方も「御消息」から窺え、さらに初期教団の制禁、掟にも見る事ができる。光明本尊とはかなり性格の異なる史料の用例であるので、その検討は別に行いたい。

1 拙論「親鸞にみる「師」と「善知識」——「御消息」を中心に」(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』二七、二〇〇五年十二月発行予定)。

2 『大正蔵』四六卷四三頁。

3 親鸞の「師」「善知識」の用例は他にもあり、特に「善知識」について『愚禿鈔』に独自の解釈を見出せるが、その例も含めて、「御消息」以上に初期真宗の教団指導者像を示すものとは言い難く、本論では考察の対象から除いた。

4 「御消息」を中心とした検討は、前掲拙論。

5 光明本尊については、信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英』第二卷(同朋舎、一九八九年)を主に参照した。平松令三氏による各図版の「解説」と「総説」(後、同氏『真宗史論攷』、同朋舎、一九八八年所収)による。本論で取り上げた光明本尊の図版も収められているので、ご覧いただきたい。

6 津田徹英氏が「光明本尊考」(『美術研究』三七八、二〇〇三年)で詳細に検討されている。

7 法然とその門下との装束の相違については平松令三氏が既に注目されている。前掲『真宗重宝聚英 第二卷』、一七九頁以下。

〈キーワード〉 師、善知識、光明本尊

(龍谷大学大学院)

(Gyakuhō sendai) from himself. Quoting *Mattoshō* 19 and *Shinran shōnin goshōsoku* 9, Furuta points out the contradiction that Shinran catches himself and others in speaking of the ultimate sinner. But, can one label others as ultimate sinners simply because one knows that one's self is such? For Shinran, the self that is known to Amida is the ultimate sinner. Shinran did not distinguish himself from the ultimate sinner, but on the contrary included himself in that category. On the basis of these two letters of Shinran we can come to understand how Shinran guided his disciples from his position of being known by Amida as an ultimate sinner.

139. The Image of Leaders in the Early Religious Community of Jōdo-shin Buddhism

Yoshimichi KURODA

In Jōdo-shin Buddhism, leaders have been called Master “師” or True Teacher “善知識”. However, although these two terms are treated as the same, I think that the meanings differ. In general, the same meaning of both terms is to lead people. The most important difference is that the Master does not have the aspect of being a fellow practitioner “同行”, which the True Teacher has. Shinran used both terms in this way.

Then, which image of leader, Master or True Teacher, was hoped for in the early religious community of Jōdo-shin Buddhism? We can discover an answer from the Kōmyō-Honzon which was made between the middle of the 13th century and the middle of the 14th. It is clear that Shinran and his disciples are drawn as Hōnen's disciples in the Kōmyō-Honzon. This means that the relationship between Hōnen and Shinran or Shinran's disciples is a Master-disciple relationship, and the one between Shinran and his disciples is that of fellow practitioners. Therefore, it can be said that people in the community hoped for their leader to be a True Teacher because the True Teacher has the aspect of being a fellow practitioner.